

活動型クラスにおける教師の楽しさ

— 「うふふ」と「もやもや」の狭間で—

李ジョン美・遠藤 ゆう子・福島 恵美子・福村 真紀子

1. はじめに

私たちはそれぞれに活動型クラスの考え方に共感することがあり、下記表のクラスを担当しています。「なぜ私たちは活動型クラスの考え方に共感したのか」、また、「活動型クラスの実践の楽しさはどのようなもので、何が私たちを魅了し続けているのか」。このような問いについて改めて考えることにより、私たち自身が活動型クラスの意義を再認識し、なおかつ読者の皆様にも活動型クラスを知っていただけるのではないかと考えました。そのため私たち4人は、学習者側からではなく、あえて私たち教師側¹⁾から見た“活動型クラスにおける教師の楽しさ”というテーマで座談会を行い、デザイン、運営という流れに沿って、振り返ってみました。

2. クラスの概要

私たち筆者4人が担当している活動型クラスの概要は、次の通りです。

表 クラスの概要²⁾

① 『「私」と「私のまわりの人たち」を表現する』
3レベル／週5コマ×15週／学習者10名／日本人学生ボランティア1名 ³⁾ 内容：「私のまわりの人たちマップ」を作り、その人たちとの関係やエピソードを話しながら、1人ずつ発表する。マップの中から関係の深い人やコミュニティを選び、考えを深めながら、エッセイを書き、最後に文集を作る。
② 『社会への発信—日本で生活しながら私を感じること—』
4レベル／週3コマ×15週／学習者15名／日本人学生ボランティアなし 内容：日本で生活している中で「気になること・もの」をテーマに、クラスでのやりとりと発表を通して自分の考えを深めていく。これらのやりとりを踏まえて自分の意見・考えをまとめ、社会に発信する。
③ 『意見を伝え合うコミュニケーション』
7レベル／週3コマ×15週／学習者8名／日本人学生ボランティア5名 ⁴⁾ 内容：学習者一人一人が「みんなに伝えたい考え・意見」ということでテーマを決め、話し合いを行いながら、整理した考え・意見をレポートに書き進めていく。最後にインターネットの投稿サイトに投稿する。

3. 活動型クラスにおける楽しさとその裏面 — 「うふふ」と「もやもや」 —

“活動型クラスにおける教師の楽しさ”というテーマで座談会を行った結果、クラスデザインと

李ジョン美, 他／活動型クラスにおける教師の楽しさ

話し合いについての楽しさが挙げられました。またそれらの楽しさは、「うふふ」と思わず呟いてしまうようなものであることが共通に認識されました。しかし同時に裏面では、デザインしきれないことや教師像などについて「もやもや」とした感情を抱いていることも分かりました。本章ではそれら「うふふ」と「もやもや」について述べます。

3.1 デザインで「うふふ」

活動型クラスの楽しさを考えると、まずコンセプトやデザインそのものが持つ楽しさが挙げられます。座談会では主に次のような面が浮かび上がりました。

1) 活動型クラスは「考え」を存分に扱う贅沢な授業である

活動型クラスでは、学習者が考えていることが教室で繰り広げられ、それが授業の中核となります。

活動型じゃない授業でも「〇〇さんの考えはどうですか？」って投げかけはする時もあると思います。だけど、そうストレートに聞くじゃなくて、活動型は、デザインに、参加者の考えを引き出す仕掛けが埋め込まれている（デザイナーが意識して埋め込んでいる）んじゃないでしょうか。

他の科目での活動の流れは、技術的なことの積み上げで考えますが、活動型の流れは人の考えの流れで決める楽しさがあります。

私は活動型のデザインの贅沢さにあるように思います。充分議論できる贅沢さがあると感じます。

* 四角囲みの中は座談会での発言内容⁵⁾。以下同様。

普段、学習者の考えに深く触れる機会があまりなく、「もっと聞いてみたい」と感じることも少なくありませんが、活動型では学習者の深い考えこそが授業の素材でもあり、目標でもあるので、互いを深く理解し、よい関係を築くことができます。このようなことが授業の中でできることは楽しく、そして、贅沢なことだと言えます。

2) 活動型クラスでは可能性の広がりが楽しめる

学習者の考えを中心に据えるということは、様々な考えがそこで展開されることになるので、テーマについてのみならず、教師の予想していなかった授業の方法や授業目標の修正などについての考えも提示されることがあり、教室ではそのような考えにも対応することになります。

活動型は学習者の「考え」が発信できたところがゴールで、学習者なりに考えを表現でき、発信できたなら、ゴールと捉えてもよいような。だから、活動型のコンセプトは幅広いですね。

どんな学習者が来るのか、(略)デザインの幅は広いと思います。可能性が広がっている状態が私は楽しいです。

活動型クラスは、綿密なシラバスを事前に立てられるものではなく、むしろ授業計画を固定することで活動型ではなくなってしまいます。満足できるシラバス形成を目指すより、様々な考えを受け入れる広い土壌を準備しておくことが肝要なのかもしれません。そして、可能性の広がりに対する心構えをする中で、学習者が期待通り、あるいは期待以上に土壌を掘り起こし、広げてくれた時、私たちは楽しいと感ずることが出来ます。それは「ヤッター！ ヨシ！」というような瞬時にわき

起こる楽しさとは違い、対話ややりとりの中でじわじわと感じる楽しさであり、思わず「うふふ」となる類のものです。そして、活動型クラスが終了してからエッセイやレポート等の完成したものを読み返したり、授業を振り返ったりする際に、再び深く染み入るような充足感を得て、「うふふ」となるのです。

3.2 話し合いで「うふふ」

1) 活動型クラスでは相互に「考え」を理解し合える

活動型クラスは、3.1で述べたように学習者が考えていることについての話し合いが授業の中核となります。他の授業でも話し合いは行われますが、学習者の深い考えに触れるものではありません。活動型は十分に議論できるという贅沢さがあり、十分な議論により学習者の深い考えも分かってきます。

学習者の考えが分かったり、考えの変遷が分かったり、その変化を近くで感じられるのは楽しいというか嬉しいというか、そんな気持ちになります。

他の授業では、「考え」に深く触れるということはありません。

今日から本格的な議論が始まり、話し合いに参加して、学習者の話を聞くのは楽しいと感じました。学習者の「顔」が見えたという感じでした。「顔」というか「考え」を通して見える「顔」ですね。

一つのテーマについて一学期間ずっと考えられるのは、確かに贅沢ですね。

つまり、活動型では十分な話し合いと議論が行えることで、学習者の深い考えが表出され、表出された考えを理解したり、変容を感じたりできることが教師としての楽しさです。また活動型は、教師が学習者を理解するという一方通行だけではない楽しさもあります。

私も考えを述べて、(学習者に)私のことを知ってもらいたいという気持ちがあり、それが(活動型の話し合いでは)叶えられます。

伝え合って、お互いに「知る」んですね。教師を含めた面々がお互によく知り合える。

このように活動型の話し合いには、教師も話し合いの一参加者として考えを述べ、学習者に理解してもらおうという楽しさ、学習者同士が理解し合えたことを感じることもできます。

2) 活動型クラスの話し合いは「時間」と「空間」を超える

話し合いの楽しさは、次のようにクラス内だけに留まらず、話し合いを振り返る内省の時にも感じられることから、時間と空間をも超えたものであると言えます。

他の授業で考えを聞いても、その時だけに終わってしまいますが、活動型は内省など授業後も関わっていると思います。

活動型は、時間も空間も超えて「拡張」していけると言えるかもしれません。

以上のように話し合いでは、学習者と理解し合えた時、学習者同士が理解し合えたことを感じる

李ジョン美, 他／活動型クラスにおける教師の楽しさ

ことができた時、楽しくなり、思わず「うふふ」と呟いてしまいます。さらに教師の期待通りに学習者が授業外でも考え続け、考えが深まり、変容していることが分かった時も「うふふ」と呟いてしまいます。

3.3 デザインしきれず「もやもや」

活動型クラスが「可能性の広がりがあること」は、3.1で述べた通りですが、それ故に教師の想定した方向から離れることもあります。

活動型をやっていると、デザインしたものと、実際運営が変わったり、離れたりしますよね。その時に「こんなに離れちゃっていいのかな」という不安、「もやもや」があります。

実は「ゴール」は教師が勝手に設定してしまっているように思います。学生には「ゴール」じゃない何かが大切なんですよ……

デザインの「うふふ」が、同時に教師を戸惑わせる「もやもや」の種でもあります。デザインの幅があるだけに、レポートの提出を拒否したり、途中で止まってしまったりする学習者がいた場合、どの程度クラス運営や目標の修正を行うかということは、教師を悩ませます。そして、このような状況に教師がうまく対応できたとしても、それが次回のデザインにそのまま活かせるかという、学習者が異なれば状況は同じではなく、思ったようにはいきません。

- A: デザイン側の狙いというのはどのくらい伝わればいんでしょうかね。裏の狙いもあるので、全部学生に示す必要はないのですが、幅がある分、どこまで学生に提示していくかというのもデザインの一部でありますね。
- B: どこまで提示するかということは私の中では、何度行っても明確になっていません。
- A: そうですよ。結局その場にいるメンバーとか状況によって異なってくるものなので、その時その時のやり方で解決していくしかないんですよ。そこは予めはデザインしきれない部分ですね。
- C: デザインしきれない、のがまだ楽しめていないと思います、私は。

「デザインしきれないところがある」ことも教師側にとっては「もやもや」であり、不安につながります。クラスで起こるすべての状況を「デザインしきれない」と認めてしまえば、この「もやもや」を楽しむこともできるのかもしれませんが、なぜか「しきれない」という気持ちになってしまうのです。これは「教師」という立場を意識しているからでしょう。次節の教師像と重なる問題です。

3.4 ゆれる教師像で「もやもや」

「活動型では、教師でなくていい」という意見が座談会で出ました。3.2では「教師も話し合いの一参加者として考えを述べるために、学習者に理解してもらえる楽しさがある」と述べましたが、その楽しさには裏面もあります。ここでは活動型クラスにおける「教師像」について考えてみます。

教師というよりは、学生の中に入って、一参加者になったような感じがするんです。今日も実はそうでした。

他の授業と異なり、自分も話し合いの一参加者として意見を述べるので、その時は先生という立場を忘れます。

学習者との距離が近いですね。

活動型では、学習者が自分自身を振り返り、発信したいテーマをクラスで話し合っ共有するの

で、互いの考えに深く触れることになります。教師もこの話し合いに学習者と一緒に参加し、自分の考えを発信します。つまり、「素の自分」を出します。なぜでしょうか。それは自分のことを知ってもらいたいからです。この時、教師はいわゆる「教師」ではなく、「一参加者」となります。知識を与える権威的な立場ではなく、学習者と同じ土俵に立ち、意見を交え、互いの考えに触れ合うのです。しかし同時に、「もやもや」とした感情も湧いてきます。

学習者が本当に伝えたいことを気づかせてあげられない、新しい発見を促せない、行き詰っている時に突破口を開いてあげられない時にもやもやします。

自分のセンスのなさといいますか、教師としてではなく、一人間として感じる時がありますね。

「一人間として」、これは前回出た「教師でなくていい」ということの裏面ですね。人間としての力を問われる……みたいな。

「教師でなくていい」と思うと同時に「教師だけであってはならない」って思うのかもしれない。

「一参加者」は、すなわち一人の人間です。教師は「一参加者」となれる、その裏面で、「一人間」だからこそその力を問われるのです。文法的知識なら「教師として」教えられますが、活動型は「教師として」教えられることはほとんどないのかもしれませんが。私たちはそのような「もやもや」を背負いながらも、それでもなお「うふふ」の心地よさを手放せません。

4. おわりに

私たち4人はともに、活動型クラスのデザインと運営を通して「うふふ」と「もやもや」の狭間に置かれています。しかし座談会后、それぞれに座談会内容を振り返ってみると、4人に共通するところもあれば、違和感を抱くところもあることが分かりました。以下は座談会后に各自が振り返った際のコメントです。

座談会を通して「楽しさ」と「もやもや」は相反するものではないことに気づきました。クラスを「自分でまとめなければ」というプレッシャーが「もやもや」を生むこと、そのプレッシャーはほかでもなく自分でかけていること、自分次第で変わっていくということですね。

活動型の実践中、一参加者となったり、教師となったりと立場を使い分けるということは、私の場合はないと気づきました。その意味では私は常に「教師」なのかもしれませんが、デザインに関しては軌道修正もありという前提で考えているところがあり、その意味では「教師」ではないのか？ と思ったりもして、活動型の教師像にも多様さがあると感じました。

私の「楽しさ」は徐々に大きくなります。デザインの時は小さな「うふ」、話し合いで「うふふ」、学期末は「ヤッター」と、学期前と末の「楽しさ」の度合いが皆と異なります。学習者を見ながら対応しようと、当初のデザインに重きを置かず、最後の作品に期待し、重きを置いているということに、改めて気づきました。

「贅沢さ」と「ゴール」は斬新な言葉でした。活動型のデザインは「大変だけど楽しい」とは感じていましたが、「贅沢」だとは思いませんでした。また「ゴール」の設定を私は意識していませんでした。私の「ゴール」の捉え方が、他の人とは違うと気づきました。

デザインや運営について互いに違和感を抱くことは、それぞれの教師が活動型クラスに対してそ

李ジョン美, 他／活動型クラスにおける教師の楽しさ

それぞれの教育観を持っているため、当然のことかもしれませんが。活動型というものは固定された「型」ではなく、その捉え方は教師によって異なり、クラスの内容や関係する人たちは多様かつ柔軟です。このことを今回の座談会を通じて私たち自身が再認識することとなりました。

本稿が、活動型クラスを理解していただくための一助となれば幸いです。

注

- 1) 本稿では、主題と合わせ「担当者」ではなく「教師」ということばを用いる。
- 2) 2011年秋学期の概要。福村が①、李が②、遠藤と福島が③を担当している。
- 3) 2コマに1名が参加している。
- 4) 1コマに1～2名が参加している。5名は総数である。
- 5) 座談会の発言の中からとりあげた主な発言内容である。発言順ではない。3.3の2つ目の四角囲み内のみ発言順である。